

円珍『法華論記』における七喩解釈について

——吉蔵の解釈との比較を中心として——

浅野 学

一 問題の所在

法華七喩と称せられる法華経の七つの譬喩はよく知られているが、印度撰述の法華経注釈書である『法華論』所説の七喩は、法華七喩の初出であり、後の七喩説の多くはこれに基づいている。『法華論』の末注書として、円珍（八一四—八九二）『法華論記』（以下、『論記』）と、吉蔵（五四九—六二三）『法華論疏』（以下、『論疏』）はよく知られており、両書に関する論考は先学によって種々なされているが、本稿ではこれまでに論考のなかった円珍釈と吉蔵釈における七喩解釈の比較対照を行う。河村（一九九七）では、『法華論』の法華十七異名についての智顗（五三八—五九七）釈と吉蔵釈について対照し、「吉蔵の学僧に対して智顗の禪師を彷彿とさせるものがある⁽¹⁾」と述べているが、法華七喩についての円珍釈においてはどのような特徴があるだろうか。

二 末注書と『法華論』の七喩

『法華論』の末注書として、『論記』は日本仏教において、『論疏』は中国仏教において、代表的な著作である。『法華論』の随文解釈である『論記』について、池田（一九七八b）では、

円珍の著述とされているもののなかで、量的に他を圧して大きな著述は、『法華論記』十卷である。（中略）円珍教学における法華論研究の意味は、質量共に大きなものがあることに相違なく、今日改めて研究されなければならないものと信ずる⁽²⁾。

と述べている。『論記』の主な特徴としては、智顗、湛然（七一—七八二）らの天台章疏を相当量、忠実に引用している点や、法相宗の基（六三—一五八二）の『法華玄賛』の解釈を批判している点などがあげられる。

吉蔵『論疏』は、円珍に先だって中国で作成された『法華

円珍『法華論記』における七喻解釈について（浅野）

論』の随文解釈であるが、吉蔵が『法華論』に依拠して、自身の常住と仏性が法華經においても明かされていることを論証したことはすでに知られる通りである。吉蔵における最初の法華經注釈書である『法華玄論』では、『法華論』を引用する際に「晚見法華論」と度々称しているが、この呼称について奥野（二〇〇二）では、

吉蔵は「晚見の法華論」と呼称することによって、最初の法華注疏を著そうとするまさにその直前になって『法華論』の存在を発見し、披見することができたという歎びを率直に告白するとともに、『法華論』に拠ったことをいうことによって、自説に正統性を付与せんとしたものと思われる。

と述べている。

なお、円珍が『論記』を撰述した時期は在唐時であった。留学中の円珍が『論記』の撰述を決意した理由について、池田（一九七八b）では、

嘉祥の疏は、二巻本に註したものであるが、円珍は嘉祥の諸研究の成果に学的刺激を受け、二巻本をテキストとして、今日伝えられるような一〇巻の論記を著わすにいたつたのであろう。⁽⁴⁾

と述べている。

『法華論』は古来、内容上から五章に分けて解釈されて来たが、七喻と三平等の章は内容的に一具のものとして取扱わ

れている。『法華論』には、

自此以下。次為七種具足煩惱染性衆生。說七種喻。對治七種増上慢心。此義應知又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫身等染慢。對治此故說三種平等。此義應知。⁽⁵⁾

とあり、両章では對治される所（所治）と、對治する手立て（能治）について説いている。七喻では衆生の七種の増上慢心を、三平等では無煩惱の人（阿羅漢）の三種の染慢を對治するという。『法華論』において規定する法華經の七喻とは、周知の如く「火宅譬喻」「窮子譬喻」「雲雨譬喻」「化城譬喻」「繫寶珠譬喻」「輪王解自髻中明珠与之譬喻」「醫師譬喻」である。

三 円珍と吉蔵の七喻解釈について

『法華論』所説の七喻について、随文解釈がなされている『論記』と『論疏』の該當箇所を確認すると、言い方の違いはあるが、大方同じような解釈をしている。そうした中、「実有功徳増上慢心」を、所謂「髻中明珠譬喻」によって對治することを説いている『法華論』の一節について注釈している箇所では、両師に注目すべき解釈の異なりが見られる。『法華論』には

六者実有功徳増上慢心。聞大乘法取非大乘。如是倒取。対治此故為説輪王解自譬中明珠与之譬喻⁽⁸⁾。知。

とあり、末注書の成立順に吉蔵釈から見ると、

聞大乘法取非大乘者。此人本学大乘。但作有所得字。故聞説大乘退大取小果。如大品中有大鳥之譬。初生無翅鳥子未有兩翅而学飛。故遂便墮落。有所得人雖發大心大行無慧方便。聞説大乘退取小果。故大品中六十菩薩聞説波若成阿羅漢。此中是凡夫人。不同大品成阿羅漢。与其大略相似也。如是倒取者。实有大乘而不取大。实無小乘而取小乘。故名為倒。又実学大乘而取於小。故是倒也。対治此故下。第二明能治対治此故為説輪王解譬中明珠与之譬喻⁽⁹⁾。知頂譬之珠最為尊貴。一乘最勝。以此賜之令其取大。

と注釈している。吉蔵は「聞大乘法取非大乘」について、有所得の人は大乘の法を聞いても退いて小乗の果を取るもので、そのようにいうと注釈している。吉蔵は、繫宝珠譬喻の注釈箇所では、「小乗非第一。謂為第二」と注釈しているが、ここでは「故聞説大乘退大取小果」と注釈している。次に円珍釈では、

論有功徳人説大乘法者。明第六人。七方便人聞説円乗不信不解。取非大乘謂為実大。自余如下。故云説大乘法而取非大乘。有釈為小未合經論。治此執故説最上乘。故譬王解譬中明珠与之。喻意⁽¹⁰⁾。知。

円珍『法華論記』における七喻解釈について（浅野）

と注釈している。円珍は「説大乘法而取非大乘」とは、七方便の人が円乗を聞いても信じず、大乘ではないものを取りそれを実の大乘であると思うから、そのようにいうと注釈している。また「有釈為小未合經論」として、円珍は「有釈」を経論の文とは合わないとして斥けている。吉蔵釈では「大乘」との対で「小乗」という述べ方をしているが、円珍釈では「七方便人」と注釈している。七方便という術語は、一般的には小乗の見道以前の修行位のことを指すが、円珍の属する天台宗では、法華經の葉草喻品の三草二木の意によって、人乗・天乗・声聞乗・縁覺乗・藏教の菩薩乗・通教の菩薩乗・別教の菩薩乗を七方便の人と立てるため、円珍釈では吉蔵釈のように小乗だけに限定した解釈ではない。ここで円珍が天台学的な解釈に基づいて斥けている「有釈」とは、『論疏』の説の可能性があることを指摘しておきたい。

四 小結

『法華論』所説の法華七喻について、円珍釈と吉蔵釈を比較対照した結果、両師の解釈は大方同じような立場ではあったが、『法華論』の文に対する注釈の視点が異なっている場合も確認された。とりわけ譬中明珠の譬喻によって対治される「実有功徳増上慢心」の注釈箇所において、円珍釈では名を伏せてはいるが、「有釈」として吉蔵釈と同様の説を斥け

円珍『法華論記』における七喻解釈について（浅野）

ていることが確認された。また円珍釈においては、極めて天台学的な解釈で「七方便」を捉えており特徴的であった。七喻解釈の比較対照からは、円珍が天台学僧として天台の解釈の宣揚を意図した様子が伺えた。

- 1 河村（一九九七）二五二頁。
- 2 池田（一九七八b）三三二頁。
- 3 奥野（二〇〇二）四一頁。
- 4 池田（一九七八b）三三五頁。
- 5 大正二六・八頁上。
- 6 大正二六・八頁中。
- 7 大正四〇・八一六頁中。
- 8 大正四〇・八一六頁上。
- 9 智証全上・一九七頁下。

〈二次文献〉

- 大正新脩大藏經第二六卷『妙法蓮華經憂波提舍』
大正新脩大藏經第四〇卷『法華論疏』
園城寺事務所編『法華論記』『智証大師全集上巻』園城寺事務所、一九一八

〈参考文献〉

池田魯参「円珍『法華論記』における天台研究の特質」『駒沢大

学仏教学部論集』第九号、一九七八 a

池田魯参「円珍の『法華論記』について」『印仏研』第二七巻第一号、一九七八b

奥野光賢「仏性思想の展開——吉蔵を中心とした『法華論』受用史——」大蔵出版、二〇〇二

河村孝照「吉蔵の法華論疏について」『印仏研』第四五号第二号、一九九七

日下大痴「法華論に就いて」『台学指針』興教書院、一九三六
苦米地誠一「智証大師円珍の密教思想について——在唐時の著作——」『大正大学総合佛教研究所年報』第二〇号、一九八八

藤井教公「世親『法華論』訳注（三）」『北海道大学文学研究科紀要』第一一一号、二〇〇三

前川健一「円珍『法華論記』の法華思想——「釈序品」に於ける『法華玄賛』批判を中心に——」『東洋哲学研究所紀要』第一八号、二〇〇二

丸山孝雄「法華七喻解釈の展開」『法華経研究 法華経の思想と基盤』第八号、一九八〇

道元徹心「円珍撰『法華論記』における「舍利」表現について」『仏教学研究』第七一号、二〇一五

〈キーワード〉 円珍、『法華論記』、吉蔵、『法華論疏』、七喻
(国際仏教学大学院大学)